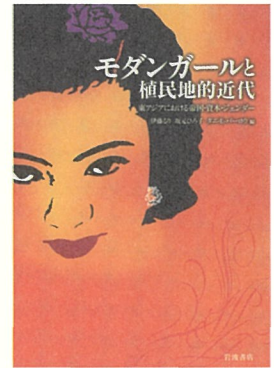


## 越境するモダンガール

伊藤るり、坂本ひろ子、タニ・E・バーロウ編

『モダンガールと植民地的近代—東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー—』

伊藤 麻衣子



日本で「モダンガール」と言えば、眉まで引き下ろしたクローシュ帽に、断髪、洋装で都市を闊歩するおしゃれで奢侈な女性たちを連想するだろう。関東大震災以降に発展した消費文化の体現者ともいえる彼女たち「モダンガール」は、西洋風の化粧をほどこし、「先端的」な衣類を身につけ、映画やデパートに繰り出す。ハリー・ハルトゥーニアンによれば、「モダンガール」という形象は、1920年代から30年代にかけての言説の中で重層決定されていったものであり、「単に映画や大衆の言説における想像物でなく、より深い根を持った社会的・物質的な変化のあらわれ」である（『近代による超克—戦間期日本の歴史・文化・共同体』岩波書店、2007年、p.p.56-73）。

日本の映画文化に注目すると、1930年代前後の現代劇映画に「モダンガール」がしばしば登場する。彼女たちは、従来の伝統的な日本女性と対照化されながら危険因子として描かれていると同時に、「近代性」を象徴する理想的な女性としても描かれている。スクリーンに映し出されるモガにまなざしを向ける観客は、彼女たちを軽蔑するとともに、羨望をもするという、複雑な心理状況におかれた。映画からも、モダンガールのイメージと社会的主体との入り組んだ関係を伺えるのである。

このようなモダンガールをめぐる近年の研究で、華々しい成果を挙げているものに、2000年にワシントンで結成された「世界のモダンガール研究会 (The Modern Girl Around the World Research Group)」（以下MGAW）がある。このグループは、2008年に、『世界のモダンガール』(The Modern Girl Around the World: Consumption, Modernity, and Globalization)をデューク大学出版局から刊行した。本書は、

MGAWのメンバーの一人であるタニ・E・バーロウを含め、2002年にお茶の水大学ジェンダー研究センターで結成された、「東アジアにおける植民地的近代とモダンガール研究会」の共同研究の成果として、2010年2月に刊行されたものである。この研究会も、MGAWに続き、モダンガール研究の第一線で活躍する注目すべきグループである。MGAWが世界を広く視野に収めようとしていたのに対し、このグループはその名が示す通り、東アジアに焦点を絞りながらモダンガールを巡る様々な問題に取り組んでいる。同年7月には、本書の刊行記念として、10人の著者全員が参加する国際シンポジウムが一橋大学において開催され、活発な議論が交わされた。

MGAWによる『世界のモダンガール』は、15人の論者による論集で、17章構成であるが、そのうち初めの2章分は、6人の編者による共同執筆となっている。第2章では、6人各々の研究対象である、アメリカ、ドイツ、中国、アフリカ、インドの化粧品広告に表象されたモガを地域・人種・階級を越えて分析することにより、モダンガール現象のグローバル性を論及する。例えば、広告のモガに示された理想的な肌の色を相互に比較し、化粧品広告のモガ像が、民族のヒエラルキー編成を促進するものとして機能した点を指摘している。第2章に続く15の論考では、広告に限らず、写真、映画、雑誌、新聞などのメディアや、社会学的な調査、批評などの文字テキストをもとに、モダンガール現象の地域的独自性と、地域を越えた共通性を考察している。

MGAWの姉妹研究グループでもある「東アジアにおける植民地的近代とモダンガール研究会」による本書も、東アジアという地域の中で、モダンガール現象を越境的にみていこうとする。対象時期を1920年代から

30年代としている点、消費、モダニティ、ナショナリズム、ジェンダーといった切り口からモダンガールを考察する点もMGAWと同じ姿勢をとっているといえよう。

しかし、MGAWにはない特徴として、本書がモダンガールを「植民地的近代」という視点から捉えようとしている点は特筆に値する。「植民地的近代」とは、「植民地主義」と「近代」の両者が相互に依存しながら互いに代補する関係にあることを指す概念である。本書では、両大戦間期と重なる1920年代から30年代までを「植民地的近代」の対象時期に設定し、従来は植民地主義の担い手として注目されることがほとんどなかった女性の役割を主要な問題としている。

本書は、10人による論考を、三部に分けて構成している。第Ⅰ部「資本の欲望」では、植民地的近代の経済とそれに対応するモダンガール表象の関係を検討している。第Ⅱ部「まなざしの政治」では、視覚や表象によって、女性がいかに社会の中に位置付けられたかを論じている。第Ⅲ部「帝国を生きる」は、第Ⅰ、Ⅱ部とは異なり、表象上の女性ではなく実在の女性たちを対象としている。日本とその植民地を含む東アジアの中で、女性たちがモガイメージといかにかわり合いながら、自らのアイデンティティを構築していったのかを考察している。

全体を通じて、「消費への欲望」、「帝国」、「ジェンダーの再編成」、「視覚的なモガ像」といったテーマが目立っている。ここでは、これらのテーマを中心に、議論を概観してみたい。

「消費への欲望」は、第Ⅰ部の2つの論文、足立真理子「奢侈と資本とモダンガール」と、タニ・E・バロウ「買うということ」において重要なキーワードである。足立論文では、資生堂のポスターに表象された女性たちには、理想の消費者・女性としての欲望が投影されていると論じている。また、バロウ論文では、上海の商品広告に現れたモダンガールのイラストとそのコピーを分析し、いかに商品を通じてモダンへの欲望が喚起されていたかを明らかにしている。

「帝国」については、伊藤るり「女の移動と植民地的近代」や、洪郁如「植民地台湾の『モダンガール』現象とファッションの政治化」が論及している。伊藤論文では、「内地」とされながらも、大日本帝国から遠く離れた沖縄のモダンガール現象を、本土や海外への女性たちの憧れ、知的サークルへの参加といった取り組みと関連付け

て分析している。日本の統治下にあった台湾を扱う洪論文では、チャイナドレス、和服、洋服といった台湾女性たちのファッションの選択が、単に近代性を表すのではなく、民族的な記号、政治的立場の表明として機能していたことを明らかにしている。

「ジェンダーの再編成」については、牟田和恵「新しい女・モガ・良妻賢母」を何よりもまず取り上げたい。牟田は、これら3つの女性像を、「文学運動という形で社会に新たな声を上げた実在した女性たちをモデルとするもの、実在する個人であるというよりも資本と帝国の欲望とファンタジーが投影された虚像、そして国家のイデオロギー教育が作り上げようとした理念」のように異なるものであるとしながらも、これらが、「近代以降の社会が女性に要請する3つの相」の象徴である、という独自の見解を示している。さらに、バーバラ・H・佐藤「植民地的近代と消費者の欲望」も、このキーワードと分かち難く結びついている。佐藤は、前著「商品としてのジェンダーと道徳」(バーバラ・佐藤編『日常生活の誕生—戦間期日本の文化受容』柏書房、2007年、p.p.74-106)で、主として中流階級の女性と修養の関わりを扱っていたが、本論では、下層階級の女性たちの消費への欲望に焦点を合わせている。下層階級の女性たちにとって、購入するかどうかに関わらず、雑誌を読むこと自体が、自らのアイデンティティを構築することに繋がっていた。

「視覚的なモガ像」ということでは、本書の多くの論文で視覚的イメージ分析がされているが、とりわけこれに力点を置いているのは、ヴェラ・マッキー「宗主国のまなざし」である。マッキー論文では、漫画、写真、絵画、デザインなどの視覚的資料を分析することで、モダンガールが、日本とその植民地の力関係に作用し、階層意識をもたらすような存在であったとしている。

このように、帝国及び植民地における人々の欲望、不安、希望といった様々な感情と思惑が反映された「像」としてのモダンガールを各論が見事に捉えている。全体を通してみても、東アジアのモガを巡る状況を越境的に展望できる画期的な研究成果であるといえるだろう。とはいえ、このように優れた本書であるが、いくつか気になる点もある。まず、全体を三部に分ける選定基準である。序章では、本書を貫く3つの問題系を、①「モガ」と名指された実在の女性たちを対象としたもの、②言説や視覚イメージによって表象されたモガが、一般社会の

認識・ものの見方を形成したとするもの、③モガを人々の欲望の対象や、願望が反映されたイメージとして捉えるものとし、以上3つを基準に、第I部から第III部を構成している。しかしながら、各論考が内包する問題は、3つの問題系のうち1つのものに限定されない。もちろん、編者たちもその点を考慮した上での分類であることは理解できるが、3つの問題系に従って構成すると、各論の持つ複雑な問題を単純化してしまうのではないかという疑問が残る。また、7月のシンポジウムでは、「植民地的近代」を、1920年代から30年代と限定するよりも、もっと射程を延ばすべきではないかという批判がなされていた。

さらに、これは評者の要望であるが、MGAWが行ったような、幾人かの論者による共同執筆の論考があるとより有意義なものになるだろう。10章それぞれの論考を比べることで興味深い現象が見出せるが、1章分を割いて、1つのテーマ——例えば、モガの漫画表象、化粧品広告のイメージなど——を設定し、それに対して各地域を横断するような分析がなされることで、個別の論考からは見出せない発見があるかもしれない。

いくつか疑問を挙げたが、批判や問題点も、優れた研究にはつきものである。議論を活発化するという意味でも、非常に魅力あふれる一冊であるといえるだろう。とにかく、本書を手にし、ページをめくってみてほしい。光沢あるオレンジ色の表紙に描かれた、エキゾチックなスター李香蘭の図像や、あちらこちらのページに配されたモダンガールのイラスト、広告、写真といった視覚的なイメージに引き込まれ、本書を読まずにはいられなくなるだろう。

本書や、『世界のモダンガール』を始めとする、モダンガール研究のさらなる発展を期待する。それと同時に、文学、社会学、映像文化、比較文化など、あらゆる研究分野で本書が参照され問題が共有されれば、モダンガールに関わる、より多面的で複雑な現象がさらに解明されることだろう。

伊藤りり、坂本ひろ子、タニ・E・バーロウ編『モダンガールと植民地的近代—東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』岩波書店、2010年

